

キリスト教の啓示に対峙する暗号の思想

越 部 良 一

ヤスパースは聖書宗教を高く評価しているのであるが、ここでは、もっぱらヤスパース哲学のそれとは違った一面、キリスト教に対決する面を、「啓示 (Offenbarung)」ということを中心にして、ヤスパースの言う「暗号」の思想から取り出してみる。

(1) 暗号とはいかなるものか

超越者の暗号 (Chiffre) (あるいは「象徴 (Symbol)」) は、超越者 (Transzendenz) とは区別される面をもつ。「現象するあらゆるものが、暗号となりうる」 (Off 158) のであるから、暗号は多であるが、超越者それ自体は一である。また、暗号は (非対象的であると同時に) 対象性をもち、その点では、内在的なものであるが、超越者は、すべてを超越し包括する全体的なもの、「あらゆる包越者の包越者」 (W 109) である。

暗号は、また「実在性 (Realität)」とは区別される。実在的なものは、科学的に研究され、普遍妥当的に実証できるものであるが、暗号の本質は非実在的である。暗号は科学的に研究され得ず、したがって普遍妥当性をもたず、歴史的 (geschichtlich) である。

暗号のこうした非実在性は、多様な形で表現される。一つには、実在的なものは不透明であるのに対して、暗号は透明性 (Transparenz) をもつと言われる。二つには、実在的なものは一義的 (明瞭) であるが、暗号は多義的 (曖昧) である。三つには、実在的なものは存立するが、暗号は消失する (verschwinden)、あるいは浮遊する (schweben)。四つには、暗号の本質は実在的、物質的ではないのであるから、暗号は科学的に不可能なことを語るものでもあり得る。例

えば、実在する人間は、死んで生き返ったりはしないが、実在性を本質とはしない暗号としては、生き返ったり、天に昇ったり、その他、非科学的なことが語られてもかまわないのである。ちょうど、実在性や科学的な見地からの荒唐無稽さをまったく問題にすることなく、人が童話に魅せられることがあるように。「童話の物語におけるように、暗号の世界においては、人は、単純に聞かねばならず、一足飛びに動かねばならない」(Ent 116)。

しかし、例えば、人間が生き返ることや、昇天することが、実在性をもち、したがって科学的に実証されるような歴史に属すると主張され、そのことが字義通り受け取られるなら、それは暗号ではない。ヤスパースにとっては啓示信仰は、こうした主張をするように見えるのである。

(2) キリスト教の啓示に対する批判

ヤスパースは啓示を「神の直接的な告知」(Off 49) と捉える。また、啓示のうちには、その本質的な一要素として実在性があると見る。こうした啓示は、キリスト教にあっては、預言者たちへの神の語りかけ、使徒たちの証言、そして聖書などとして存在するが、中心となるのは、神がイエスという実在する人間となったという啓示である。そして、キリスト教の諸々の啓示は、世界内における、これもまた一つの実在性であり啓示である教会によって保証されるものである。

以上のようなものとしてヤスパースによって捉えられたキリスト教の啓示は、様々な点で、暗号の思想とは区別され、ヤスパース哲学から批判的に見られる。第一に、啓示は、ヤスパースの言う包越者の思想のうちにはない。包越者の諸様態の確証は、主観と客観との分裂の自覚としてあるから、主観性から離れた客観それ自体は明らかにならないことを自覚する。主観性における超越者の現れは、超越者自体ではなく、超越者の暗号である。暗号は、したがって直接的に超越者であるのではなく、直接的には（主観が直接関わるものとしての）世界内の存在である。これに対して啓示は、神の「直接的な」現前であり、その中心には、イエスという人間が神自体であるということがある。それが文字通りのことであるなら、啓示は暗号ではなく、暗号の世界のうちにはない。

この第一点に関連しているが、第二に、啓示においては実在性（その中心にキリストの実在がある）が、その本質的な契機となっているのに対して、暗号の本質は実在性にはない。第三に、啓示は人間にとって一義的（明瞭）であり、それに対する服従が求められるのに対して、暗号は多数あり、その解義もまた多様でありえるから、そこには人間が自由に動く余地がある。第四に、キリスト教の啓示信仰においては、人間となった神の実在性は、特定の場所と時に局限され、しかも、その一回限りであるとされる。キリスト教の啓示は、それ以外の啓示を真理とは認めず、排除するところがある。史実の上では、啓示信仰のこの唯一性、排他性は、暴力とむすびついた。暗号の思想は、神への道が多様な形で、多様な暗号を通して可能であるとし、排他的な真理と、それに結びつく暴力とに反対する。

（3）啓示を暗号と解する試み

実在的なものを超越者自体とすることは、ヤスパースにとって迷信（Aberglaube）である。したがって、キリスト教の啓示は、ヤスパース哲学にとっては、一つの迷信ではないかという疑念を引き起こしうるものである。しかし、それがヤスパース哲学の枠内での啓示の唯一の捉え方ではない。もう一つは、啓示を、啓示の暗号（啓示という暗号）として理解する、つまり、啓示を、神話であり、比喩的なもの（その価値は、実在的な事実を語ることのうちにあるのではない）として理解する捉え方がある。そこでは、啓示の本質的な契機としての実在性それ自身が「暗号」として捉えられることになる。つまり、「実在性」は、あくまでも比喩的、象徴的なものとして捉えられるわけである。

しかしながら、実在性を本質的な契機とする啓示を、（実在性を本質とはしない）暗号とすることは、「啓示の意味の変化」（Off 504）であり、「私が聞くとところによると、いかなる神学者も、暗号への啓示の変化に賛同しえない」（Off 505）。そしてまた、ヤスパースが啓示を暗号として捉えるときでも、ヤスパースはこの啓示の暗号を重要視しはしない。「啓示の実在性が暗号として通用するとき、それはもはや暗号世界全体から際立ってはいない。啓示の実在性は、神自身が実在的に現在したならという、人間の限りない憧れが、一瞬いわば満たされた

と見られるような暗号であるが、即座に、創造された人間の自由存在の厳しさと偉大さの背後へ退き、この厳しさと偉大さにとっては、神は、容赦なく隠れたままである」(Off 505)。

(4) 哲学的信仰の他者としての啓示信仰への態度

啓示の実在性を、迷信としてあるいは暗号として理解することは、ヤスパーズの言う哲学的信仰の枠内でのことである。しかし、啓示をヤスパーズは哲学的信仰の理解の及ばないもの、哲学的信仰の枠外に存立するものではないかとも考えている。こうした自覚は、啓示信仰の「恩寵」という考え方を確認することのうちに強められる。「[啓示を] 信仰する者は恩寵を通じて信じるのです。私はこの恩寵を経験したことはありません。この恩寵を求めるように駆り立てる何ものも私のうちにはありません」(Pr 68)。

自らの理解が及ばない完全な他者としてキリスト教の啓示信仰が意識される時、ヤスパーズは、その排他性が暴力的とならぬ限り、それを哲学的信仰と対等の真理ではないかと考え、完全な他者であるかも知れぬこの啓示信仰との交わりを追求し続ける。「哲学的に信仰する者は、他の根源に由来するものとしての、彼に疎遠な信仰を、たとえ彼がその信仰を理解できなくとも、可能的な真理として承認せねばならないであろう」(Off 533)。

「人間たちは、必ずや共に語り合わねばならないが、必ずしも共に祈らねばならないというわけではない」(Off 110)。ヤスパーズにあって、共に祈ることができぬという事態、理解できぬが、真理であるかもしれぬ信仰があることの自覚は、自己（人間）の有限性（自己が神でないこと）の自覚であり、それは超越者の自覚に通じている。世界内における諸々の真理の分裂と、そこでの実存間の精神的な闘いが、一なる真理を、人間と世界を超えたものとして、つまり超越者として自覚させうるのである。「実存に対する実存という、存在における真理の多重性が、初めて完全に、深淵のもとでのかのめまいをもたらすのである。このめまいがあらゆる地盤を奪い去るのを押し止めることはできなかったものであり、こうしためまいから、超越者が解放するか、[人間の] 現存在が視野を狭め、我意を張って不安うちに固執する自己欺瞞へ逃避するかなのであ

る」(Ph II 440)。ヤスパースが繰り返し啓示信仰の自らにとっての疎遠さを強調するのは、それが超越者への自らの信仰を自覚する一つの仕方となるからなのである。

*ヤスパース著作の引用略号(引用文中の〔 〕は引用者の補足)

- ・ Ent : *Die Frage der Entmythologisierung*, Piper, 1954. (3. Aufl. 1981).
- ・ Off : *Der philosophische Glaube angesichts der Offenbarung*, Piper, 1962. (3. Aufl. 1984).
- ・ Ph : *Philosophie* 3 Bde, Springer Verlag, 1932. (4. Aufl. 1973).
- ・ Pr : *Provokationen*, Piper, 1969.
- ・ W : *Von der Wahrheit*, Piper, 1947. (3. Aufl. 1983).

(法政大学非常勤講師)